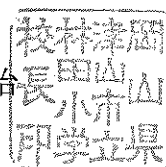


平成25年度 津山市立林田小学校 学校評価書

校長 居 森 宏 治



1 自己評価

I 評価結果

(1) 方法

保護者アンケート・児童アンケート・職員アンケートの結果等を基に、20項目について数値目標を設定し、どの程度達成できたかを評価する。項目は学校経営目標3つに対応する。

- 学校経営目標
- 1 個々の児童及び、児童集団の向上心とやりぬく力を育てる・・・①～⑪
 - 2 子どもたちを取り巻く環境の整備に努める・・・⑫～⑲
 - 3 学校の教育力を高める・・・⑳～㉔

○評価は三段階評価とする。

A：目標を十分達成した

B：目標をほぼ達成した。

C：目標を達成できなかった。努力を要する。

※項目毎に評価し、総合的な評価も行う。

(2) 結果(数値目標のあるもののみ)

評 価 項 目	目標 (%)	結果 (%)	評価	総合
①「先生はわかりやすく教えてくれる」という児童の割合	85	85.0	B	B
②「わかりやすく教え、学力向上に努めている」という保護者の割合	85	96.0	A	
③ 6時30分以前に起床するという児童の割合	80	58.0	C	
④ 22時以前に就寝するという児童の割合	80	63.8		
⑤ テレビやゲームの時間が2時間以内の児童	80	54.8		
⑥ まわりの人によく挨拶をしているという児童の割合	85	86.2		
⑦「学校の決まりを守っている」という児童の割合	80	80.4		
⑧「まわりの人と仲良くしている」と感じている児童の割合	90	88.1	B	
⑨「子ども同士のつながりが深まった」という保護者の割合	80	90.7	C	
⑩ う歯治療率が70%以上である	70	50.0		
⑪「不審者や災害時の行動の仕方を知っている」という児童の割合	90	92.9		
⑫ 避難訓練(学期1回)、毎月1回の安全点検と迅速な修繕	完全実施	完全実施	A	B
⑬ 懇談会、アンケートなどで地域、保護者の要望を知る	計画通り	計画通り	B	
⑭「子どもについての相談に真剣に対応している」という保護者の割合	80	91.0		
⑮「子どもの長所や努力したことを認めてくれる」という保護者の割合	80	96.0		
⑯「間違った行動についてきちんと指導している」という保護者の割合	90	92.0		
⑰「社会のルールやマナーを教えている」という保護者の割合	90	98.0		
⑱「学校であったことを家族と話す」という児童の割合	90	77.1	A	
⑲「学校は教育方針や活動をわかりやすく伝えている」という保護者の割合	90	98.0		
⑳ 地域の人材活用がよくできている	予定回数	予定以上	A	
㉑「学校に行くのが楽しい」と感じている児童の割合	90	85.5	C	
㉒ 教員が、全員一回以上、授業公開を行う	予定以上	予定回数	B	B
㉓ どの学年も落ち着いた1年間だった	全学級	娘校は2学期	C	
㉔ 職務を積極的にすすめたと考えている教職員の割合	85	85.0	B	

Ⅱ 分析・改善方策

それぞれの項目ごとの課題と改善方策は、以下のように考えている。

(1) 「個々の児童及び、児童集団の向上心とやりぬく力を育てる」について

ア. 確かな学力、児童・保護者による授業の評価 ①②

全国6年学力・学習状況調査、県中学1年学力・学習状況調査、県5年確かめテストなどの結果から、高学年の国語・算数の基礎基本の力と活用力がともに全国平均、県平均を下回ることが明らかになった。全教員が危機感を共有し、各学年で6年卒業時を見据えた学力向上対策に取り組んでいるが、成果を十分実感できるまでに至っていない。2学期児童アンケートによると、約15%の児童が授業がわかりにくいと感じている。肯定的な評価をしている児童の多くも、さらに多様な学びの場を求めていることが推察される。保護者アンケートでは学校の学力づくりについて肯定的な評価が多かったが、学校全体の学力低下の実態が明らかになったことで、PTA役員を中心に授業の一層の充実と個別指導の工夫を求める動きが具体化してきた。このような児童や保護者の願いに誠実に対応しなければならぬと考えている。

今後も、教員個々の授業力や指導力を高め、一斉授業や教師の協力による指導の充実を図りたい。無理のない範囲で補充学習を進めたい。そのために、特に力を入れねばならないのが、学びの基盤である基本的な生活習慣と学習規律の定着である。家庭との連携を強化し有効な手立てを講じたい。

イ. 基本的な生活習慣 ③④⑤⑥⑦

テレビやゲームなどの時間が多い。また、就寝時刻と起床時刻が遅い児童が多い。そのため、十分な睡眠がとれないまま登校する児童が増えている。そのことは、授業中の集中力の欠如、家庭学習や読書時間の減少にも深く関わっている。あいさつやきまりについては、学校でも家庭でもよく指導しているが、なかなか徹底しない実態がある。生活習慣やマナーなど基本的な様子に関することについては、家庭・地域とも連携し、中学卒業時を見据えた取り組みを継続していきたい。

ウ. 人間関係づくり ⑧⑨

保護者の多くが「子ども同士のつながりが深まった」と感じているが、「まわりの人と仲良くしている」と感じている児童の割合は目標値にやや届かない。授業や行事などを一層工夫することで、認め合い、支え合い、高め合う集団を育てていきたい。また、保護者との情報交換の質を高めることで、児童一人一人の自己肯定感や有用感を高めながらよりよい人間関係を築いていきたい。

エ. 体力づくりの推進、保健指導⑩

自分の体への関心を高める試みの一つとして、本年度も「う歯治療率が70%以上」の目標を設定したが、厳しい結果となった。姿勢の悪さもなかなか改善しない。食育については、栄養教諭との連携により成果を上げている。今後も、子どもたちの健康生活への関心を高められるよう保健指導に力を入れたい。また、基本的な生活習慣づくりとの関連で保護者への働きかけも工夫したい。

オ. 安全指導の推進⑪

避難訓練は、計画通り実施できたが、回数、内容等で検討を要する。大きな災害時や停電時などにおける地域防災・防犯組織との連携も視野に入れて取り組みたい。児童アンケートで「不審者や災害時の行動の仕方を知っている」という児童の割合は高かったが、学校でも、地域でも、子どもたちが思わぬことでけがをしたり、事故に遭ったりするケースが増えてきた。危険を察知したり回避したりする力が、年々弱くなっているのではないかと危惧している。校内での安全指導を徹底し、地域見守り組織などの協力も得えながら、「自分の命は自分で守る」という自覚を持った子どもを育てるようにしたい。

(2)「子どもたちを取り巻く環境の整備に努める」について

カ. 施設・設備の管理⑫

安全点検が確実に行えた。今後も、情報管理も含めて点検項目を定期的に見直し、管理の徹底を図りたい。備品修理、購入、活用等、計画的に取り組めた。今後も、職員の管理意識と管理能力を高めていきたい。

キ. 保護者・地域との連携⑬⑭⑮⑯⑰

「学校は、子どもについての相談に真剣に対応している」「先生は、間違っただ行動についてきちんと指導している(けじめのある指導をしている)」と回答した保護者の割合がともに90%を超えたのは評価できる。一方で、児童アンケートでは「学校であったことを家族と話す」と回答した児童の割合が77.1%と低かった。保護者に、学校であったことや自分の気持ちを伝えられない児童がいることを深刻に受け止めている。また、本年度も、学級懇談などへの保護者の出席が少なく、担任との情報交換に課題が残った。児童の実態に目を向け、課題を共有しての有効な連携が十分でなかったことを強く反省している。学校からの問題提起の仕方を工夫したり、子育てに関する参加体験型の研修を企画するなどして、懇談会や各種行事への保護者の参加意欲を高めたい。

ク. 情報公開・情報発信⑱

開かれた学校づくりのための情報提供は、一定の評価を得ているように思う。今後も、地域・家庭の意見を吸い上げながら、一層役立つ情報提供に努めたい。

ケ. 地域人材の活用⑳

学校支援地域本部事業などを効果的に活用し、予定していた回数以上の取り組みができた。本年度は、特に学習支援の輪が広がりとてもありがたかった。今後も、無理のない範囲での協力を呼びかけ、教育活動の充実に努めたい。

コ. 楽しい環境づくり㉑

児童アンケートでは、学校が楽しいと答えた子どもの割合が目標値を下回った。生活面・学習面で悩みを抱えている子どもたちへの組織的な支援が急務である。支持的風土のある集団づくりに努め、わかる授業・楽しい授業を工夫することで満足度90%以上の楽しい学校を目指したい。

不登校・いじめについては、今後も安心・安全な環境づくりをすすめることで未然防止を徹底する。また、発生時には、校内方針に基づき、内外の組織を生かして迅速かつ誠実な対応に努めていく。

(3)「学校の教育力を高める」について

サ. 教職員の指導力の向上㉒㉓

・特別支援教育の視点を取り入れた研究の成果を生かし、担任及び専科教員全員が授業を公開した。(その内、他校への公開2)今後も、授業研究に力を入れ、授業で勝負する教師集団を目指したい。

・2つの学級で、担任及び児童への組織的な支援を継続した。全教員の児童理解の力を高め、指導力の向上を図ることで、誰が担任になってもきめ細かな対応ができるような学校を目指したい。

シ. 協力体制・組織力の強化㉔

リーダー層を中心に組織的、機能的な学校運営ができつつある。今後も、全教員が教師としてのスキルアップを図り、課題を共有しながら改善型の取り組みを進めていきたい。小中連携も前進させたい。

2 学校関係者評価委員会

上藤清志 (民生児童委員)
尾島 治 (元PTA会長)
末澤 修 (元PTA会長)
中原弘子 (主任児童委員)
原田博史 (元PTA会長)
井上憲一 (学識経験者)

玉置俊作 (スポーツ少年団指導者)
西村照子 (読み聞かせボランティア)
藤田正拓 (おやじの会会長)
多木晴彦 (元PTA会長)
宗森研介 (前PTA会長)
西村敏之 (PTA会長)

3 学校関係者評価(中間期の評価を含む)

(1) 個々の児童及び児童集団の向上心とやり抜く力を育てる。

《学力向上》

○ 基礎学力の定着と応用力の開発という困難な問題に取り組む姿勢が見られるのは良いと思う。指導内容の複雑化と時間不足の中で、選択とスピードの重要性が増している。教職員にその自覚があるようなので今後の成果に期待している。

- ・学力の向上に向けて、授業改善の具体的な目標が示されている。
- ・基礎基本の定着のために反復練習が大切である。落ちこぼれのないようにしてほしい。
- ・復習だけでなく予習に力を入れてはどうか。
- ・家庭学習の時間が足りないのではないかと。有効な仕組み作りをしてほしい。
- ・子どもの得意分野について、家庭で伸ばせるような提案を学校からもできないものか。

○ PTAも学力づくりへの協力を惜しまないとのこと。こうした連携があるのは良いことだ。

○ 本好きな子どもたちが育っているようだ。学校の図書館をしっかりと活用させてほしい。

(2) 子どもたちを取り巻く環境の整備に努める

《言葉遣い、マナー》

○ 子どもたちの言葉づかいや大人に接する態度などが、とても気になっている。地域の大人にだけでなく、先生に対しても礼儀正しくできていないようだ。これには、大人側の問題もあるように思う。世代によって価値観の違いもあるだろうが、家庭でも、地域でも、学校でも基本的な躰はしなければならない。先生たちには、子どもの気持ちを大切にしながらも、けじめのある接し方をしてほしい。

《健康・安全、基本的生活習慣》

○ 登下校の歩き方を見ても、自転車の乗り方を見ても、子どもたちの安全意識が低下しているようだ。守られることが当たり前になっていないか。自分の命は自分で守るという気持ちを育てなければならない。学校・家庭・地域の連携が一層必要である。特に、ヘルメットの着用については、急いで検討すべきではないか。

○ 子どもたちは、無菌状態(過保護・過干渉)の中で耐性が育っていない。我慢がでない子、注意を素直に聞けないわがままな子が増えている。家庭の教育力をつけることが課題。

○ 近年、睡眠不足が原因で子どもたちに気になる現象が起きているという番組を見た。アンケート調査の結果によると、就寝時間が遅い子が多いようなので心配している。テレビやゲームの時間が長い子もかなりいる。勉強や読書の時間が取られてはいないか。PTAでも改善に取り組んでいるとのことなのでねばり強く続けてほしい。

○ ネットトラブルなど子どもの生活の中に危険が潜んでいる。ネット等のメディアに依存しない教育が必要である。親にも子にもよく分かるように指導してほしい。

《家庭・地域との連携》

○ 学校の方針に多くの家庭が理解を示し、取組を評価している。

○ 昔は、PTA活動が活発だったが、今は中心になって活動する層と無関心層で二極化している。そのため、学校と家庭、家庭と地域のつながりが弱くなっているように思う。

- ・PTAは、学校支援地域本部事業等とも連携しながら、地域社会全体で子どもを育てる取組を推進してほしい。子どもたちには、もっと地域のすばらしさを知ってもらいたい。

○ 子どもたちの生活は、その基本が家庭にあるのでPTAが実施している親子チャレンジの取組は有効と思われる。子どもの意識と親の意識を同時に高めることはむずかしいが、大切なことであり、今後もそのような具体的な取組を継続する必要がある。

○ 子どもも大人も何かと忙しい時代であるが、子どもたちは、親の愛情を求めている。しっかりと抱きしめ、関わってほしい。林田の子は良い子ばかりです。これからも、ボランティア活動などで学校を支援していきたい。

(3) 学校の教育力を高める

○ 学力にしても、躰にしても、中学卒業時を見据えて取り組まねば力にならない。小中での連携が進められているのはよいことだ。

○ 学力を育てるためには、子どもたちが安心して楽しく学校生活を送ることが大切である。いじめや不登校などについて、学校が組織で迅速に対応してくれるよう望む。

○ 指導技術や経験が不十分な若い教師を学校全体で育て、支えるシステムを充実させてほしい。

4 来年度の重点取り組み（学校評価を踏まえた今後の方向性）

あたりまえのことが、あたりまえにできる学校づくり ～ やさしく、かしこく、たくましい子 ～

（１）個々の児童及び児童集団の向上心とやり抜く力を育てる。

○学力の向上 → 全国学力・学習状況調査など客観的なデータに基づく計画的な取組

基礎基本の定着

課題解決能力、活用力の育成

→

体験的な活動の場の充実

指導の重点化と徹底

- ・児童同士、教師と児童がつながりあい、高め合い、学び合う学習集団づくり
（楽しい学級生活を送るための調査の活用、不登校傾向の児童など集団に適応できない児童への迅速な対応）
- ・特別支援教育の視点を大切にした授業づくり
（個別支援計画と個別指導計画の実施、効果的な指導過程などの工夫）
- ・教師の協力による指導の充実（校内組織を生かした少人数指導、習熟度別指導）
- ・補充学習の工夫（３・４・５年を中心に）
- ・学習規律の定着
- ・書くことを重視した指導の継続
- ・家庭学習や読書習慣の定着（家庭と連携し、役立つ手引きを作成。学校図書館の活用）

○自治活動能力の育成 → 創造的建設的な活動の推進

○健康安全教育の充実 → 食育の推進、体力の向上、う歯治療率のアップ、姿勢の矯正

○基本的な生活習慣の定着（あいさつの徹底）

（２）子どもたちを取り巻く環境の整備に努める

○「楽しい学校」づくり → すべての子どもに居場所があり、自己肯定感がもてる取組

- ・家庭、地域、関係諸機関との連携強化「つなぐ、つながる、つなげる」
- ・学校支援地域本部事業等の一層の活用
 - 安全・安心（地域防災・防犯組織）
 - 環境整備（ＰＴＡ・地域関係者）
 - 多様な学び（学習支援スタッフ）
 - ※ふるさと学習の推進

（３）学校の教育力を高める

○「指導力の向上」を図る。

授業で勝負する教師集団

- 内にも外にも開かれた研究の推進
- 小中連携による、中学進学時を見据えた学力づくり

○全教職員の学校づくりへの参画意識の向上と自己管理能力の育成

- ・確かな実態把握による学校課題の共有と継続的、組織的な改善活動
- ・「計画→実行→評価→改善→調査」サイクルでの学級経営、授業改善